◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方
◎第 45 回　広い角度で社会を見つめる目を育てよう

全国日本語学校連合会　研究員　對馬好一

令和 6 年 6 月初旬のある日、横浜市の某私立中学校でホームルームの時間を利用して、1 人の卒業生による授業が行われました。題して「日本及び日本人について考えてみよう！」。

14 時 25 分、6 時間目開始の少し前になると、約 250 人が入れる階段教室に 3 年生が次々に集まり、着席しました。仲のいい友達とじゃれあっている者、大きな声で話している者など、男子中学生らしい元気な姿が見られました。私も教室の最後列に座り、授業の様子を傍観（ぼうかん）・傍聴（ぼうちょう）することにしました。

定刻になり、生徒の前に立った校長先生が、「今日の講師の方は、50 年以上前、今の君たちと同じように、この学校で勉強していました。大学卒業後は大手銀行に勤めていて、その後、政府機関にも勤務されたそうです。今日は、その経験を生かして、普段聞いたことがない話を聞きましょう」と話すと、生徒からは、「オー！」という歓声とともに、登壇した先輩に万雷の拍手が贈られました。

「ボクは、ちょい悪中学生でした。そのころはテニスばかりしていて、社会のことなどあまり考えていませんでしたが、就職してからは様々な経験をしました。ここ数年は、暇ができたこともあり、日本と日本人の在り方について考えてきました」などと話し出すと、中学生らの目は輝き、講師の一言ひと言に歓声が上がりました。

この授業の準備として、歴史、哲学、文明論など、様々な学者の著書を読み込んで講義内容を構成したそうです。そこで思いついたのは、学者や学校の教員はそれぞれ専門分野があり、その分野の時代や地域、専門領域にフォーカスした著書や講義はあるものの、古代から現代に至る歴史、文明、宗教、文化を広い目で見渡した形の話をする人は極めて少ないということだったそうです。

そこで思いついたのが、日本の歴史、文明、宗教、文化を古代から現代まで、空を飛ぶ鳥のような目で見て、日本人の特徴を他国との比較も交えながら浮き彫りにすることで、この国の identity ＝この国がこの国であり他国とは違う独自の特徴＝を中学生と一緒に探っていきたいということでした。「その過程の中で、少年たちに日本人の誇りを築かせたい」と考えたそうです。

授業のために、87 枚にわたるパワーポイントが用意されました。この講師はパソコンの扱いなどにそれほど明るくないことから、この中学校の若手教諭の一人が、講師の原稿をもとに、手作りした教材です。そのことを講師が告げると、生徒からは、その教諭に野次と称賛の声が飛び、パソコンを操作していた教諭が立ち上がってガッツポーズをとると、やんやの喝さいが教室を包み、和（なご）やかな雰囲気が広がりました。

講師は、「日本国の特徴の根幹は大きく 2 つある」との仮説を立てて話を始めました。

その第 1 は、建国以来、1945 年の敗戦後の米国などによる占領期を除けば、一度も異民族に支

配されたことがありません。そのため、和の精神を貴ぶ文化が根付いていて独自の文化文明を構築してきました。その結果、異民族との戦争に明け暮れてきた国家（近年では中東諸国やロシアなど）のような憎しみの連鎖は生まれていません。文化面でも、仏教や密教、キリスト教を基軸にした京都の葵祭や祇園祭に見られる王朝絵巻風の美意識がある一方、土着的な強直で禁欲的な思考である世阿弥の能に出てくる亡霊や、千利休の茶の湯、雪舟の水墨画などの存在をあげ、幅広く奥深い広がりを指摘しました。

2番目には、日本列島は水資源が豊富であり、水を保つことが必要な稲作文化であるため、砂漠化の影響がなく、自然と共生する文化が根付いており、中東などの砂漠地帯で発展した一神教の影響を受けていないと主張しました。

こうした考えを聞いた生徒たちは、お互いに意見を出し合い、講師にも質問を投げかけます。

紀元前 800 年頃からギリシャや北インドのブッタ、北方中国の老子や孔子、イスラエルのイエス・キリストなどと並行した時代、日本では縄文時代から弥生時代にかけて農耕文化が発展し、欧州やアジア各地に劣らない文明が展開された話を聞くと、中学生たちは日本文化の奥深さに思いを致していました。

さらに、日本が朝鮮半島、中国大陸で経験した 663 年の「白村江の戦い」での壊滅的敗北を経て、唐・新羅の脅威に対抗するため、国家体制を近代化すべく律令体制を整備しつつ、我が国の固有の良さを守るために、「日本書紀」「古事記」が並行して編まれた話に及ぶと、生徒たちは雄大な古代文明に思いをはせていました。そのうえで、この時の敵の背後にあるモンゴル文化に話題が及びました。「大モンゴル帝国は、極東から欧州までに及び、その西端は黒海・地中海に臨んでいた。東西の海の支配を目指しており、そのことは、今のロシアによるウクライナ侵略や、北海道の北方領土の帰属問題とも地図上で相重なる」などの話が出てくると、生徒の間からは「なるほど！」と歓声が上がりました。

生徒たちは知識欲に満ちているものの、これまでの中学校の授業の手法では、その意欲を満足させることができていないのでしょう。

授業は、ここで 45 分の時間を使い果たし、「続きは後日」ということになりました。生徒たちは、先輩に大きな拍手を贈りながら「もっと続けて聞きたい」と、後ろ髪をひかれる思いで、それぞれの教室に戻っていきました。

ホームルーム終了後、校長先生は「私たちにはできない話をしていただいてありがとうございました。生徒たちは目が開けたことでしょう」と講師に話しかけました。

講師は「明治新政府で近代日本が目指したものは、日本の伝統と西洋文明の融合だったはずだ。

残念ながら、先の大戦の敗戦以来、日本人の間に自虐史観（じぎゃくしかん）が蔓延している。この状況に危機感を感じ、まずは自国の歴史や文明を学ぶことにより、自己の identity を探っていきたい。私が勤めた銀行では行員に対し、リベラルアーツ教育を行っている」と話していました。リベラルアーツ教育というのは、一般には「生きるための力を身に着ける手法であり、『こうあるべき』という考え方から解放され自由に学ぶための学問」だと言われています。

日本の初等教育（小学校・中学校）では、「国語」「算数（数学）」「社会」「理科」…と、授業科目が細分化されており、この日の授業のように様々な角度から現代社会や歴史全体を見る教育手法が確立されていません。生徒はおろか、教員たちにも、様々な角度から社会を見る目が育っていないのは大変残念な現実です。そして、それは中等教育（高等学校）、高等教育（大学・大学院）でも大きな差異はないと言わざるを得ません。

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナとの闘い、中国の膨張主義と台湾併合、北朝鮮の核武装化、米国の孤立化と社会の分断、欧州における極右政治勢力の台頭、そしてわが国の国力の弱体化など、様々な国際情勢の間には何があるのか。そうしたことは学問領域を超えた研究手法である学際研究（インターディシプリナリー・アプローチ）が必要であり、そのための訓練は中学生のころから行わなければならないことが、この授業を通じてよくわかりました。

残念なことに、今の日本では、公立、私立を問わず、こういう広く長い目での教育という物が軽くみられているのが実情です。

今回は、私立学校だからこそ、こういう講義が試みられ、実施されましたが、これをどこの学校でもできるか、そして、通年のカリキュラムに組み込めるかというと、その可能性は限りなくゼロに近いのが実情です。それはなぜでしょう。日本の大学などにおける学問や教員養成教育が、科目別の縦割りで行われているからに他なりません。

「教育は 100 年の計」と言います。次代の日本人を育て、その人たちが担う豊かな社会を築いていくためには、様々なアプローチが必要でしょう。そして、時間軸でも、地域の広がりでも、枠にとらわれず、広い視野でみられる人材教育が求められていると思います。

この日の実験授業がそのきっかけになればいいのですが、自民党のある文教族議員は「改革に一番抵抗しているのが現場の教員たちだ。私たち自身がもっとフレキシブルに政策提言して時代に合った教育現場を作らなければならない」と言っていました。

この講師の考え方や手法がすべて正しいわけではありません。この私立中学でさえ、すぐに全面的には受け入れられるわけではないでしょう。

私も某専門学校で政治学の授業を担当しています。世界各国の国造りの歴史を語る中で、できるだけ現在の国際情勢、我が国の国内事情を引き合いに出し、比較研究をするようにしています。こうした取り組みをさらに具体化し、若いころから広い視野で物事を見つめられる環境づくりをすることが大切であることを、今回の実験授業を傍聴して痛感しました。